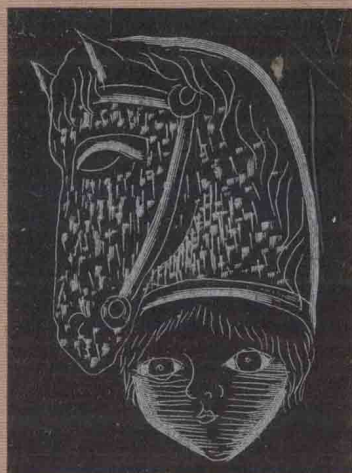


木馬の騎手

三浦哲郎



木馬の騎手

三浦哲郎

新潮社版

木馬の騎手 (もくばのきしゅ)



著 者 三浦哲郎 (みうらてつお)

昭和五十四年十月十日発行

昭和五十四年十二月十日三刷

発行者 佐藤亮一

印刷所 株式会社光邦 製本所 神田加藤製本

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電 話 業務〇三(266)五一一 編集〇三(266)五四一

定 価 一二〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

木馬の騎手 ■ 目次

接吻

7

睡蓮

25

厄落し

43

星夜

59

初秋

77

ロボット

95

木馬の騎手

遠出

113

遊び

131

出刃

149

鳥寄せ

167

付添い

183

メリー・ゴー・ラウンド

201

装
幀
／
司

修

接
吻

一

頭がぐらりとして目が醒めそうになるたびに、キワは、いつものように爺っちゃん荷馬車で眠っているのだとばかり思っていた。そうでなければ寢床がこんなに音を立てて揺れるわけがないからである。

町へ出た帰りで、空っぽになった荷台には粗い蓆むしろだけが敷いてある。そこに自分が、まるくなつて寝ている。轍が深く刻まれている田舎道だから、鉄輪を嵌めた車輪は絶えずがたとと音を立て、馬車はひっきりなしに軋みながら揺れるが、それでも目が醒めそうदैて醒めないのは、町の居酒屋で食べさせて貰ったおでんですっかり腹がくちくなっているからだ。

こちらがおでんを頬張るのを眺めながら、焼酎をコップで三つも飲んだ爺っちゃんも多分、手綱を持ったまま頭を垂れて居眠りをしているのだろう。馬に聞かせる舌うちや、だだだあという掛け声もときこえない。

それがいつものことだから、馬もすっかり心得ていて、そのままひとりで馬車を曳きながら村へ帰っていく。途中、べつに難所もないから、立ち止まるとすれば放尿するときだけだ。馬は、歩きながらも糞をするが、どういふものか放尿するときだけは立ち止まる。牡馬だから、尿が地面を打つ音が高い。その音で、ぱっちり目が醒めてしまうこともある。

揺れがやんで、あたりが静かになったので、キワは却って目が醒めそうになった。村の家に着いたのか、それとも馬が放尿するのか——ところが、不意に、頭の上で学校とおなじようなベルが鳴り響いたので、キワはびっくりして目が醒めた。

起き上ってみると、そこは爺っちゃん馬車の荷台ではない。

「まだ大丈夫よ。ここは宇都宮。もう一時間とちょっとで上野だからね。」

前の席のおばさんが、眼鏡の奥で笑いながらそう教えてくれた。

そのおばさんの隣の席には、さっきまでは本ばかり読んでいる若い男がいたのだが、それがいつのまにか和服の婆さんに替わっていて、その婆さんが胡散臭げに目尻でこちらをじっとみている。キワは、なんとなくばつが悪くて、頷くともなく顎を引いたまま窓の外へ目をやった。

外はもう、たそがれで、ホームやそのむこうにみえる駅舎には蒼白い明りが点もついていた。ベルが鳴り終ると、それらがうしろへ流れはじめて、やがて窓ガラスに自分の広いおでこが映った。出かけてくるとき、なるべく大人にみえるようにと婆っちゃんが髪を三つ編みにしてくれたので、そうでなくても広いおでこが、みっともないほど広くみえる。

キワは、窓ガラスに映った自分のおでこが油を引いたように光っているのをみて、初めて自分が全身に汗をかいているのに気がついた。それなのに、なにやら薄ら寒い夕暮だという気がしていたのは、知らぬ間に車内の天井にも点もついていた蒼白い明りのせいだろうか。

東京の父親のところは、村で見馴れている赤い裸電燈であつてくれればいい。そう思いながら、座席の下からリュックを引き出し、なかから町の商店の名入りの手拭いを取り出して顔や首筋を拭いていると、

「この子、ひとりなのかしら……。」

和服の婆さんが独り言のようにそう呟くのがきこえた。

「……ええ、ひとりですって。青森の方から乗ったらいいんですけどね、上野までいくんだそうです。」

ちよつと間を置いてから、前の席の眼鏡のおばさんがちいさな声でそういった。

「ま、青森から……よくまあ、ひとりで。」

と婆さんがいうので、褒めてくれたのかと思うと、

「切符は、持ってるんでしょうね。」

「ええ、持ってますよ。お祖父さんが馬車で町の駅まで送ってきて、買ってくれたんですって。」

「へえ……馬車でねえ。」

と婆さんは妙なことに感心している。

大人たちは、時々こちらを見縊って筒抜けの内証話をするから、目の遣り場に困ってしまう。キワは、手拭いを畳んでリュックに仕舞うと、また窓の方へ目をやって、それでもやはり、念のために、薄手のセーターの鳩尾みぞおちのあたりを片手でそっと掴んでみた。

首から紐で肌着の内側に吊してある婆っちゃ手製の布袋には、鎮守様のお守りと、まさかの時のために爺っちゃん持たせてくれた千円札が三枚と、それに切符が入っている。人目を盗んで汽車に飛び乗った子供と間違えて貰っては困る。

「いくつぐらいかしらねえ。」

「四年生ですって。」

「四年生が、ひとりで東京へなにしにいくのかしら。いま、学校はお休みじゃないんですう?」

この婆さんは田植え休みも知らないとみえる。

「なんでもね、お父さんが東京へ働きに出ていて、そのお父さんに会いにくんですって。」

「この子、ひとりで? お母さんはどうしたんですしうねえ。」

「さあ……私もそう訊いたんですけど、お母さんの話になると、急に黙っちゃうんです、この子。」

眼鏡のお婆さんは、仙台の手前から乗ってきた。車内販売のプリンを一つ御馳走してくれた

ので、訊かれるままにぼつりぼつりと話したのだが、こんな退屈凌ぎの話の種になるのだった
ら、啞のように黙りこくっていればよかったと、キワは後悔した。

母親が、弟二人を連れて山むこうの実家へ帰ってしまつてから、もうそろそろ一年になる。
それというのも、父親が東京へ働きに出かけたきり二年も音沙汰なしだったからだ、そんな
ことを行きずりの他人に話したところで、どうなるものでもない。

外の夕闇のなかを流れてゆく燈火を、ただぼんやりと見送っているうちに、キワはまたあく
びが出そうになつた。今朝、村の家を出てきたのはまだ暗いうちだったから無理もないが、も
うすぐ東京だから眠つてはいけない。

キワは、窓ガラスを鏡にして、手のひらでほつれた髪を撫で上げてから、目印の赤いリボン
を結び直した。すると、不意に胸が水車小屋のような音を立てはじめた。

二

上野駅のホームは、人の流れがまるで水嵩を増した川のようにであつた。実際、キワはデッキ
で思わず躊躇い、背後から重い鞆に腰を突かれて、川で水浴びするときのように、両足を揃え
目をきつくつむつて飛び降りた。それから、人の流れのなかで時々渦に巻かれるように、何度
も踵を軸にしてくるりくるりと軀を回転させながら歩いていった。

ホームが急に広くなるところまでくると、どこからか自分の名を呼ぶ声がきこえた。けれども、それが女の声だったので、聞き違いだったかもしれないと思ってそのまま前へ歩いていると、突然うしろからリュックを掴まれた。びっくりして振り向くと、

「あんた、キワちゃんでしょう？　小鮎沢のキワちゃんでしょう？」

赤いカーディガンの女の人が顔を覗き込むようにしながらそういった。みたこともない顔だった。こちらはいかにも小鮎沢からはるばる出てきたキワである。黙って頷くと、

「ああ、よかった。みつからなかったら、どうしようかと思ってたのよ。これが結構役に立ったね。」

女の人はそういって、赤いリボンを結んだ三つ編みの髪を摘んでみせた。笑うと、赤く塗った唇の間から眩しいほどに金歯が光る。

「さあ、いこう。迷子にならないように手を繋いでいこうね。」

キワは、女の人の手が、まるで壁人形の手のようにひんやりとして滑っこいのに、びっくりした。しっかり握っていないと、自分の手が滑って抜け落ちそうだった。

この人は一体、誰だろう。キワは手を引かれて改札口の方へ歩きながら、そう思った。てっきり、父親が迎えにくてくれるものだと思っていたから、キワは面くらっていた。父親はどこにいたのだろうか。改札口の外にいたのだろうか。

それを訊こうと思って、舌で乾いた唇を濡らしていると、女の人の方から、